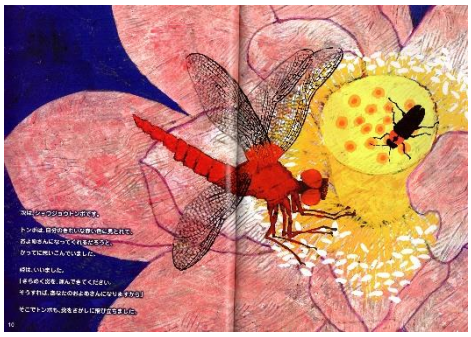
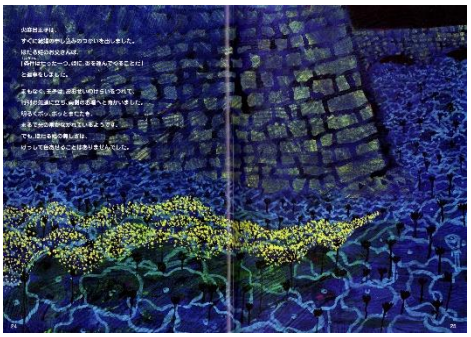
グリフィスおとぎばなし

グリフィス文学において見逃せないジャンルがお伽話です。主に大正時代に、世界各国の物語を採録した本を何冊も刊行しています。彼にとって縁の深い欧州のオランダ、ベルギー、ウェールズ（父方のルーツ）、スイス（母方のルーツ）、東アジアの中国、朝鮮、日本です。彼の最初の日本お伽話集“Japanese Fairy World”は 1880（明治 13）年、三冊目となる“Japanese Fairy Tales”は 1923（大正 12）年に刊行されました。これら作品集には、舌切り雀、猿蟹合戦、頼光と酒呑童子などおなじみの物語の他、見慣れないタイトルも収められています。それらは彼自身が福井生活において着想を得たオリジナル作品であり、日本人の歴史と文化を母国の人たちに伝えようとした意識が現れています。福井市はグリフィスの福井お伽話 2 作品から、絵本『ほたる姫』『お銀ちゃんのみたゆめ』を制作しました。

朗読サークル「まつもとおはなしポケット」の皆様は、開館当初よりグリフィス作品の朗読に意欲的に取り組んで下さり、自ら訳文と紙芝居を製作し、その絵を市にご提供いただくことで最初の絵本『ほたる姫』が制作されました。その後、他 4 作品の絵本を自ら制作されました。当館ライブラリにおいて全 6 作品をお読みいただけます。『雷太郎』以下の 4 作品は事務室にて販売もしております（1 部￥1250、セット割引あり）。

01『ほたる姫』　原題 The Fire-Fly’s Lovers　絵：西條由紀夫



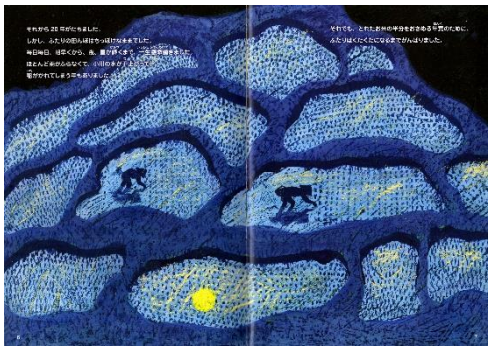


主人公は福井城のお堀のほたる、話の筋は「かぐや姫」です。昆虫が愛される国にグリフィスが暮らした当時の崩れかかった身分社会を映すように、お姫様に憧れる求婚者として様々な虫たちが登場し、次々に哀れな最期を迎えます。

02『お銀ちゃんのみたゆめ』　原題 Little Silver’s Dream　絵：青化

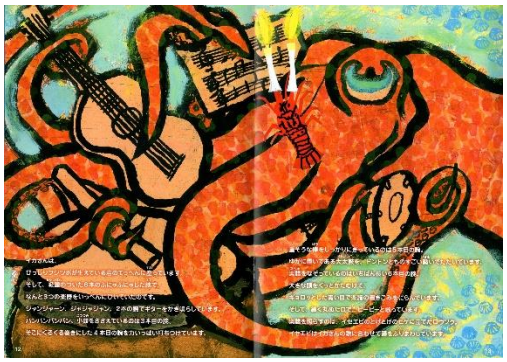
少女が夢の中で船亡霊や南海の猩々に出会うゴーストストーリー。猩々たちによる蔵造りの過程の詳細な描写に、福井で海鼠壁の自邸の建築過程を見ていた理化学教師の経験が思われます。また、蔵に収められるのは人間が酒に溺れて失った幸せという題材に、牧師グリフィスの面貌が現れています。

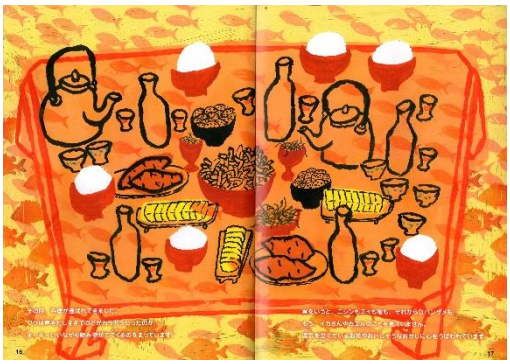
03『雷太郎』　原題 The Child of the Thunder　絵：西條由紀夫



子のない夫婦が天から授かった子供が成長し、竜の姿に帰って父母の元を飛び立ち、雲の中へ消えゆくまで見つめているラストシーンに、故郷の両親から遠く離れ太平洋を渡った作者の思いが感じられます。営々と棚田作りに勤しみ、実りの半分を領主に納める貧農の人生を描いた主題には、日本におけるグリフィスの観察と脱身分化への共感が明らかです。

04『海の中のゆかいな音楽会』　原題 Lord Cuttle-Fish's Concert　絵：西條由紀夫



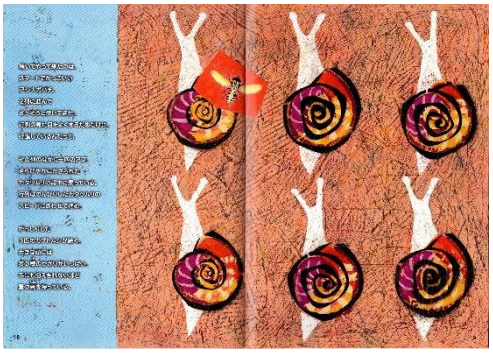


日本は海の幸に恵まれた国です。グリフィスは福井で新鮮な魚が食べられることを喜びました。物語は海の生き物たちが催す大宴会の一部始終を描くものですが、作者自身福井では侍たちの酒宴に招かれ、普段は慇懃な彼らが羽目を外し陽気にふるまう場に幾度も付き合っています。笑いが薬になるという話もグリフィスの性格に見合っています。

05『漆がくれたおくりもの』　原題 The Gift of Gold Lacquer　絵：西條由紀夫

英語で japan といえば漆器。開国当初から西洋人が夢中で買い求めた、日本を代表する工芸品であり、その製造法にも神秘性がありました。一定の温度・湿度における空気中の水分との化学反応が、類稀な強さをもつ天然塗料の秘密であることが、古来の産地である越前に赴任した理化学教師による文学作品を生みました（グリフィスは滞在中、越前和紙の工程もつぶさに観察しています）。仏教の教えを背景にしたストーリーにも、宗教者であった作者らしさがあります。

06『アシナガ殿の大名行列』　原題 Lord Long-Legs' Procession　絵：西條由紀夫



グリフィスを迎えた福井は、武士が治める身分社会でした。彼は滞在中、その終わりに立ち会いました（廃藩）。東京へ去る旧藩主の行列を涙で見送る沿道の群衆は、グリフィスの心に焼き付く光景となりました。グリフィスは身分で役割が決まっていた旧社会理解にとって最も平易な可視化といえる「大名行列」の構成員たちを、様々な昆虫に置き換えることで戯画化しています。近代化により過去の世界となった情景が、新日本に共感するグリフィスの哀惜を伴わない明るい追憶によって描かれる今作、絶品は翻訳・編集者である下條夫妻の福井弁を駆使した訳文です（共通語訳つき！）。「ちょっと、見てみねま（見てごらん）」。